

HOW TO グループ学習

グループ学習 はじめの一歩

片本宏茂 (大阪・大阪市立天下茶屋小学校)

1. はじめに

「マットをして、どんな勉強も一人でやらず、友だちと教え合ってやったほうがコツなどがわかって、一人でやるよりうまくなる」「初めは嫌やったけど、楽しくなり、一人が失敗するとかできない技があれば、みんなでその人にアドバイスや、はげましの言葉を言って、これまでの勉強とはちがう。」これらは、初めてグループ学習をした子どもたちの単元終了時のまとめで書かれたものです。実践を通して、学習集団のよさに気づき、みんなでうまくなるよさを見つけた子どもたちでした。子ども同士がかかわり合い、その中で技術のポイントがともにわかり、ともにできるようになっていく。それが同志会のグループ学習であり、「異質協同の小集団学習」といわれるものです。

2. グループ学習実践づくりの中核は「教える中身 (学習内容)」

体育の授業を構想するとき、なんといっても一番大切なことは「この単元や授業で何を教えるか」を明確にしておくことです。「教える中身 (学習内容)」が不明確だったり、ぶれたりすると実践はうまく進みません。したがって、「教える中身 (学習内容)」を明確にするためにしっかりと教材研究・教材分析をします。各教材の教える中身については、

まずは同志会の著作「輝くシリーズ」「たのスポハンドブック」などを参考に考え整理します。

3. グループ学習実践の準備

(1) 単元 (教材) を決める

出会った子どもたちや学級の様子を見て考えます。4月は何の教材から始めるか。各学期ごとに学習集団として発展していくように、子どもたちの1年間のストーリーを描きながら考えます。私の場合、春は短距離走・リレー・ハードルやマット、夏は水泳、秋・冬は民舞や球技が多いです。

(2) 教える中身を明確にする (教材で教えることは何か。その時間で教えることは何か。)

教材研究をもとに、具体的な「教える中身」を明らかにします。それが子ども同士の観察ポイントのヒントにもなります。実践終了時に「わかっていること (知)」「できていること (術)」「育っていること (観)」を文章表現してみます。そして教える中身は、今できている子どもまだできていない子ども、どの子どもにも共通して学ばせる内容 (共通課題) であることが大切です。個人のめあて別になると、学習集団とは成りえないからです。共通の課題があるから、子どものでき具合の違いから「できるためのポイント」を子どもたちによ

って明らかにされていきます。

(3) 学習目標を考える

「教えたい中身（学習内容）」が子どもの課題となるように具体的な目標を考えます。「できること」「わかること」「学び合うこと」といった視点でつくります。子どもがイメージしやすい目標であり、数値目標などにして実践終了時の評価が可能な目標にします。

(4) 学習用具、場所、時間数を確認する

体育は特に教具や道具、場所などの条件を整えることが重要です。マットの数、鉄棒の数、ボールの数、コートはいくつ取れるか。数によってグループの数が決まるからです。

教具・道具は学習を効率的に進めたり、自分の思う実践を進めたりするために重要です。例えば、とび箱が7個しかない時、40人学級だったら「6人グループが5つ」と「5人グループが2つ」のようになります。1つのとび箱に6人では効率が悪くなります。指導にかける時数は、少なくとも10時間以上の時数は欲しいです。他の単元の時数を調整して、一年のうちこれかと思う教材は時間をかけて取り組みたいです。

4. 実践を構想する（表1）

これは4年生の側転をしたときの「授業過程」です。以前の実践をもとにこれからの

表1

次	時	学習活動	学習内容
1	0	オリエンテーション ねこちゃん体操	いきなり側転（ビデオ撮影）。学習目標を知る。グループづくり。マットの出し方、並べ方。
2	1	コツのでき具合チェック くまさん歩き くまさんのさんぽ	・腰を高く・手に体重をかける・アゴのあげ（視線）
	2	くまさんのさんぽ ライオンさんがガオー	側転の向きの確認・視線・手の挙げ（胸の開き）
	3	ライオンさんがガオー ゾウさん（とび箱を使って）	足手手足足の順番・足の振り上げ・体重移動
	4	ゾウさん（とび箱を使って） ゾウさん（マット2枚を使って）	手の着く高さを徐々に低くしていく（とび箱→マット2枚→マット1枚）
3	5	グループでコツを見つける。ゾウさん 問「手をつくとき、どこを見ればいいか」 ※以降、毎時間「ゾウさん」を行う。	視線（手と手の間を見る） 側転の手足の着き方に近づけていく。
	6	川とび側転 問「上手な側転をするには、どうしたらいいか」 班で見つけたコツを練習する。	足手手足足の着き方を直線にする。 ※一 人ずつの側転をビデオ撮影。
	7	側転 問「せすじがピンと伸びて足がまっすぐ上がる側転にするには、手や足をどこにつけばいいか。それはなぜか。」	手足の着く位置の研究 踏み込み足の前に手を着く
4	8 10	グループで習熟練習。 自分の側転は何型か。	自分の側転のチェック 手型足型を使ってチェック。練習計画を考える
5	11	側転の練習 側転のビデオを撮る	発表会 まとめの感想文を書く

実践を構想します。

(1) どうすればうまくなるか（できるようになるか）

「何を、どのような順序で教えるか」を考えます。この教材での技術ができるようになるために、技術の系統を明らかにして指導の順序を考えます。教え合いをするためには、「技術の系統」を観察ポイントとして知っておくといいです。

(2) どうすればわかるようになるか

表1にあるように「コツのでき具合チェック」「グループでコツを見つける」「習熟練習」と進めました。

単元初めは、グループ学習の仕方を学ぶために、動きのポイントを提示し、お互いにチェックさせ、できるためにはコツがわかっていることが大事であることを実感させます。次に、問題（発問）を出し、その答えをグループで考え実験し確かめさせます。与えられた技術ポイントではわかることは難しく、子どもの認識を通すことで「わかる」が深まります。そして、習熟練習で教え合うことを通して、これまでわかってきた（または、わかっていない）ポイントの理解が深まるのです。

(3) どうすれば学習集団となるか

①異質集団のグループをつくる

「学習集団」を作るために「わかり具合」「でき具合」が違う子どもたちをひとつの集団として組織します。そして、一人ひとりの「わかり具合」「でき具合」の違いを比較・検討して課題解決する学習を進める中で、技術認識や「学ぶ力」を身につけていきます。グループをつくるときに考えることは、・男女混合・「うまい子」と「へたな子」が混じる（そ

の教材が技術的に苦手な子は各グループに分散させる）・「理解の早い子」と「理解の遅い子」が混じる・「リーダーシップのある子」と「後からついていくタイプの子」が混じる（集団に入りにくい、協力して活動しにくい子は各グループに分散させる）。

②グループノートをつくる

教え合うためには、グループのメンバーのでき具合を観察し合い、チェックすることから始めます。小学一年生でも、「できた・できなかった」を見合い、アドバイスをする活動に取り組みます。そのためのグループノートをつくります。ノートの主な項目は「学習内容」「本時の目標」「グループの目標」「グループの考え」「発問」「チェック表」「反省・課題」あげられますが、当然、実践のねらいに基づいて内容は変わって行きます。

③感想文を書く

授業後すぐに書きます。「今日の授業でわかったこと」を中心に書くのですが、これも実践のねらいによって「自由記述」であったり「このことは書いて」と指定したりすることがあります。感想文を書かせることで子どもの「技術認識」と「グループ学習」の様子がわかります。読んでコメントを加え、グループ全員で読み合います。取り上げたい感想文はクラス全体でも読み合います。

5. オリエンテーション

（授業の全体計画を子どもに提示する）から始めたい

オリエンテーションとは授業の全体計画のことで、「学習の意義・目的目標・内容・方法・学習後の姿への見通し・総括の仕方など」を提示し、一緒に考える「学習」活動です。その学習を土台にして「どのようなグループを作るのか」を考え、授業に入っていきます。

合意形成を行うことで、学習がより子どものものになります。

以前に実践した5年生のサッカー学習では、「共有課題」を持たせることを中心に「オリエンテーション」を行ないました。学習に入る前に、「うまい」「へた」という能力差で友だちを観るのではなく、どの子にも「サッカーの楽しさを味わいたい」という「願い」があることを理解し合い、お互いに共有する課題（ボールをさわりたい、シュートを決めたいなど）に気づかせたいと考えました。

①アンケートでみんなの思いを知る（アンケートの結果を読んだ感想を書いてもらいました。）

・ぼくはサッカーのアンケート結果を読んで、きれいな人でもがんばってわかうとしている人がいっぱいいました。・ぼくはアンケート結果を読んで、ふしぎに思ったことがあります。それはサッカーのきれいな人が多いのです。みんな同じ思いをしている人がいるので、私はちょっとやる気がでてきた感じがしました。・サッカーのことが好きではない人がサッカーの楽しさを知りたいと書いていた。・きれいな人ができるようになりたいことの中で、「シュートができるようになりたい」と書いている人が3人もいました。

②「私のサッカーの歴史（作文）」を書く。サッカーの苦手な子が次のような作文を書きました。

私は初めてサッカーの授業をした時、あんまりルールを知らないし、ボールをけるのもうまくないから、サッカーは好

きではありませんでした。けど3、4年の時、（中略）味方に「ナイス」って言われて、それがうれしくてサッカーが好きになりました。けど、ちがうチームの時、ゴールキーパーになりました。その時、味方に「お前、ちゃんとしろよ！」って言われて、それからあまり好きではありません。サッカーの授業でいちばんいやな思いをした一言でした。そして、ぎやくにうれしかったことは、自分のけったボールがゴールした時です。自分が入れた点数で勝った時は、ゴールした時の2倍くらいうれしかったです。

その後、技術調査などをして学習目標をつくり、学習を始めていきました。「目標①サッカーの楽しさを味わう②教え合ってサッカーの学習をしよう③自分たちで学習を進めよう」

6. おわりに

もちろん、以上のようなこと全てを網羅しないと実践できないわけではないことは当然です。実践は実践者の「思い」が一番。その思いを子どもたちにどう伝えるかに苦心するのですが、まず一步踏み出して実践をしてみてください。一度実践すれば、もうそれは自分の実践ですから、自分の実践を大切に振り返って、そこから実践を太らせていきましょう。そしてそれぞれの個性的な「グループ学習実践」の交流ができればいいなあと思います。